

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 30 日現在

機関番号：32421

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2015～2016

課題番号：15K13210

研究課題名(和文) 国際結婚家族三世代における日本文化の継承と文化的アイデンティティおよび教育支援

研究課題名(英文) Inheritance of Japanese culture, cultural identity and educational support in three generations of intercultural families

研究代表者

鈴木 一代 (SUZUKI, Kazuyo)

埼玉学園大学・人間学部・客員教授

研究者番号：40261218

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,200,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、1990年初頭以来、インドネシアで実施してきた日系国際児の文化・言語の継承と文化的アイデンティティ形成に関するこれまでの研究成果に加え、日系国際児からその子ども(国際児二世)への文化の継承を把握することにより、国際結婚家族三世代(日本人の親、日系国際児、国際児二世)にわたる、日本文化・日本語の継承および文化的アイデンティティ形成について明らかにし、日系国際児や国際児二世に必要な教育支援について考察した。

研究成果の概要(英文)：This was part of a longitudinal study that was started in the early 1990s. The present study aimed to clarify the inheritance of language and culture as well as the cultural identity formation of intercultural families. The participants were three generations of Japanese-Indonesian families living in Indonesia, namely Japanese women married to Indonesian men (the first generation), their children (the second generation) and grandchildren (the third generation). Semi-structured Interviews and participants observations were mainly employed. The results showed the inheritance of Japanese language and culture as well as cultural identity formation in three generations. Furthermore, the educational support for the second and the third generation of Japanese-Indonesian families were discussed.

研究分野：異文化間心理学 発達社会心理学 異文化間教育学

キーワード：国際結婚家族 文化的アイデンティティ 文化・言語の継承 教育支援 親子三世代 縦断的研究 フ
ィールドワーク インドネシア：日本

1. 研究開始当初の背景

グローバル化の中で、国境を越えたヒトの移動が急速に進んでいる。特に、1980年代後半からの日本人と外国人の結婚(国際結婚)の急増と、それともなう国際結婚の親をもつ子ども(以下、「国際児」)の増加は著しい(人口動態統計)。このような状況のなか、日本においても、国際結婚家庭や日系国際児についての理解が必要不可欠になってきている。そのため、近年、教育学、社会学、心理学等の専門分野において、国際児や国際結婚家庭を対象にした研究に関心が集まり始めている(例: 渋谷, 2013)。しかしながら、まだスタート地点に着いたばかりであり、研究成果の蓄積は十分とは言えない。

研究代表者は、1990年初頭以来、インドネシア在住の日系国際児(一方の親が日本、他方が非日本人の子ども)の言語・文化の継承と(文化的)アイデンティティ形成についての研究をおこなってきた(鈴木, 2004, 2007, 2008, 2012など)。他方、鈴木(2011)は、2008年から、基盤研究(C)「日系国際児のアイデンティティ形成とその支援のあり方に関する実証的研究」(H20~22年度)の研究代表者として、日本を含む5カ国(日本、カナダ、インドネシア、イギリス、ドイツ)の日系国際児と日本人の母親を対象にした調査結果を報告書としてまとめた。また、2011年からは、基盤研究(B)「日系国際児の日本文化の継承と文化的アイデンティティ形成および教育支援に関する研究」(H23~26年度)の研究代表者として、アジア(インドネシア)で成長する日系国際児37人とヨーロッパ(ドイツ)で成長する日系国際児32人の合計69人(10代後半から30代前半)を比較検討することによって、言語・文化の継承(習得)および文化的アイデンティティについて、両国の日系国際児の共通点および相違点を明らかにし、教育支援を明示した。

20余年にわたる研究の間に、結婚し、子どもを持つ成人日系国際児も少しずつ増えてきている。これまでの日系国際児の文化・言語の継承および文化的アイデンティティ形成に関する研究をさらに充実させ、それを教育支援へとつなげていくためには、日本人の親から日系国際児への文化・言語の継承だけでなく、日系国際児からその子ども(以後、「国際児二世」とする)へのそれらの継承について把握する必要性が生じてきた。

2. 研究の目的

本研究では、1990年初頭以来、インドネシアで実施してきた日系国際児の文化・言語の継承と文化的アイデンティティ形成に関するこれまでの研究成果(学齢期や青年期の日系国際児やその親を対象)に加え、成人した日系国際児(特に結婚し子どもをもつ国際児)からその子ども(「国際児二世」)への日本文化・日本語の継承を把握することにより、国際結婚家族三世代(日本人の親、日系国際

児、国際児二世)にわたる、文化・言語の継承および文化的アイデンティティ形成について明らかにし、日系国際児や国際児二世に必要な教育支援について考察することを目的とする。(当初、比較検討のため、ドイツにおける同様な調査を予定していたが、テロの脅威のため調査を実施できなかった。)

3. 研究の方法

(1) 調査参加者

1991年より実施している、インドネシア在住で日本語補習授業校(以下、補習校)に在籍する日本・インドネシア国際児の文化的アイデンティティ形成についてのフィールドワークなかで出会い、すでに日本語補習授業校を卒業(あるいは中退)し、成人した日本・インドネシア国際児(一方の親が日本人、他方がインドネシア人の子ども)のうち、結婚し子どものいる日系国際児(日系二世)その子ども(国際児二世=日系三世)、および日系国際児の日本人の親(日系一世)からなる国際結婚家族三世代7家族(21人)が主な調査参加者である。調査を実施した国際結婚家族三世代には、補習校在籍経験のない日系国際児がいる家族が2家族あったが、本報告には含めていない。

(2) 調査期日・場所

調査は、2016年8月から9月および2017年3月の2回、各約3週間、インドネシア(バリ州K地域)でフィールドワークを実施した。調査(半構造化面接、参与観察)は、一家族につき、1回から4回おこなった(うち、最低1回は全三世代、そのほかは世代ごと)。1回の調査時間は約2時間から約8時間だった。調査場所は、調査参加者の家、レストラン、カフェだった。なお、K地域では、補習校(ブレイグループ、幼稚部など)等において見学や参与観察をおこなった。

(3) 調査方法

調査は、主に家族三世代全員および個人を対象とした面接(半構造化面接)だが、国際児二世が乳幼児であるため、参与観察を併用した。また、フィールドワークでは、「国際結婚家族三世代をとりまく環境」やその変化を把握した。半構造化面接の内容は、鈴木(2004, 2007, 2008, 2011)を参照し、日本人の母親(日系一世)および日系国際児(日系二世)の国際児二世(日系三世)への言語・文化の継承、発達期待や教育、文化的アイデンティティ形成などである。なお、必要に応じて、補習校の講師や保護者、日本人会などから聞き取りをおこない、多面的にデータを収集した。

調査の際には、調査参加者に、調査目的および守秘義務について十分に説明したうえで、調査協力への同意を得られた場合のみ調査を実施した。個人情報の取り扱いに関しては個人が特定されないように十分留意した。

また、面接調査の際には、承諾が得られた場合には IC レコーダを使用した。フィールドノートに記録するとともに、終了後には、調査の全体的な印象や感想を書き留めた。面接言語は日本語がほとんどだった（必要に応じて、一部インドネシア語を使用）。なお、研究代表者はインドネシア語での日常会話が可能である。

（４）調査結果の整理・分析

半構造化面接および参与観察によって収集したデータは家族ごとに整理した。

本研究以前の日本人の母親（日系一世）および日系国際児（日系二世）のデータを加え、と統合し、質的に分析をおこない、総合的に検討した。

国際児二世（日系三世）を取り巻く環境については、これまでのフィールドワークによって把握した内容の確認とともに、環境の変化に着目した。

４．研究成果

（１）国際結婚家族三世代を取り巻く環境の主な特徴

インドネシアと日本は良好な関係を維持しており、国際的観光地であるバリ州 K 地域には、多様な文化的背景をもつ人々が居住している。2015 年 10 月現在、バリ州の日本人の長期滞在者は 2083 人、永住者は 763 人で合計 2846 人だった（バリ総領事館在留邦人調査）。永住者の多くはインドネシア人と結婚した日本人やその子どもと推定される。未申請者や調査には含まれないインドネシア国籍に変更した元日本人を考慮すると、3000 人程度の日本人・日系人が居住していると推測される。K 地域は、日本人・日系人に対して肯定的であり、日本語も高く評価されており、「国際児としてのアイデンティティ」（鈴木、2008）の形成の条件のひとつである日系国際児を肯定的に受け入れる環境が存在する。すなわち、日本人および日系国際児・国際児二世は社会的に受容されている。さらに、K 地域には、国際結婚者を主体とする日本人・日系人コミュニティが存在し、補習校はその管轄下に置かれている。補習校には、プレイグループ（27 人）、幼稚部（64 人）、小学部（146 人）、中学部（49 人）などがあり、大多数が日系国際児である（2016 年 12 月現在）。なお、ここ数年、20 代以降の日系国際児が結婚し、国際児二世が誕生し始めている。

（２）調査参加者の主な属性と特徴

日本人の親（日系一世）は全員母親（50 代）で、夫はバリ・ヒンドゥ教徒だった。3 人が夫とは離別・死別していた。子どもの数は二人が 6 人、三人が 1 人だった。2 人は職業をもち、他は基本的には主婦だがサイドビジネスをしている。1 人を除き、子どもと同居しているか、子どもの近隣に居住していた。

日系国際児（日系二世）は、20 代で、女性

6 人、男性 1 人だった。配偶者が国際児だった 1 人を除き、インドネシア人（バリ・ヒンドゥ 5 人、キリスト教 1 人）と結婚していた。高卒が 3 人、専門学校卒・大卒が 4 人で、男性 1 人および女性 3 人は就業していたが、そのほかは主婦だった。3 人は日本生まれ、4 人はインドネシア生まれで、全員、現地私立校出身で補習校に在籍した経験をもつが、その期間はさまざまだった（小学校の数年～大学生）。また、全員が日本への一時帰国をしていた（回数には個人差があった）。国籍は、日本あるいは二重国籍が 4 人、インドネシアが 3 人だった。子ども（国際児二世）の数は、一人が 5 人、二人が 2 人だった。

国際児二世（日系三世）は 10 人で、第 1 子が 7 人（女兒 5 人、男児 2 人、1～5 歳）、第 2 子が 3 人（女兒 2 人、男児 1 人、1～3 歳）だった（年齢は調査時）。国籍は、インドネシア 6 人、二重国籍 4 人だった。4 歳以上（4 人）は、インドネシアの幼稚園に行っていた。なお、本研究では第 1 子に着目する。

（３）言語・文化の継承

言語の継承：

【日本人の母親】インドネシア語は良好である（一人を除いて、インドネシア人夫も日本語が可能）。子ども（日系国際児）には、日本語を使用しているが（インドネシア語が混ざる場合もある）、孫の国際児二世に対しては、生後まもなくは、日本語を使用していたとしても、孫の成長とともに、インドネシア語の使用が増加していった。国際児二世が日本語を理解できないためである。しかしながら、一人は、国際児二世がわからなくても、日本を使い続けていた（日系国際児にも一貫して日本語を使ってきた）。

【日系国際児】程度には差があるが、全員が日本語とインドネシア語のバイリンガルで、総合的にはインドネシア語が優位だった。特に読み書きに関してはインドネシア語の優位が顕著だった（「居住地の規定性」（鈴木、2008 など）。インドネシア語はネイティブと同等かほぼ同等だが、日本語については個人差が大きかった。子ども（国際児二世）に対しては、インドネシア語を使用しており、日本語は単語程度だった。日本人の母親（日系一世）が在席するときは、国際児二世に日本語をより多く使用していた。インドネシア人の配偶者は一人を除き、日本語はほとんど話せなかったが、子どもの日本語習得については否定的ではなかった。家庭の主言語はインドネシア語だった。

【国際児二世】言葉が話せる年齢の国際児二世は、インドネシア語を話していたが、日本語も受動的には理解していた。また、プレイグループや幼稚園に行くようになると、インドネシア語の優位が顕著だった。なお、国際児二世 2 人は補習校のプレイグループ・幼稚園に一時的に在籍していたがあるが、現在は、インドネシアの幼稚園に通っている。

文化の継承

【日本人の母親】 インドネシア・バリ文化をほぼ理解している。日系国際児には、日本文化を伝えるための努力をしてきており、国際児二世にも、日本の文化を継承させたいという願いをもっていた。しかしながら、「孫はかわいいが、責任はない」と語っている母親が多く、孫を育てる責任は、親である日系国際児にあると考えていた。

【日系国際児】 日本人の親の日本文化継承への熱意、補習校での日本文化の学習、日本への一時帰国および長期滞在経験等によって、全員両文化の知識を習得しており（インドネシア文化が優位）、程度に差があっても日本文化が継承されており、両文化の考え方・感じ方を理解していた。国際児二世に対しては、日本文化のよい面を伝えたいと思っていたが、実際には、現実的な育児に手一杯の様子だった。日系国際児Kは、「日本人の母親は日本語を是が非でも習わせたい。でもハーフは違う。その母親からもらった分しか（日本を）もっていないし、日本人ではないので、難しい。（略）子どもには、言葉ではなく、日本のマナーを伝えたい」と語っていた。

【国際児二世】 日本人の祖母と同居しているか、インドネシア人の父親の家族と同居しているか、核家族かにもよるが、日本文化や日本人の感じ方・考え方の継承は容易ではないことが推察された。国際児二世がインドネシアのプレイグループや幼稚園に行くようになると、インドネシア文化の圧倒的な優位が顕著になるようだった。

（４）文化的アイデンティティ

【日本人の母親】 日本とインドネシアの二つの文化の視点を持ち、そのバランスをとりながらも（一部はブレンドしている）、時間とともにインドネシア文化が優位になるが、基盤には日本人としてのアイデンティティが保持されていた。

【日系国際児】 「日系国際児」であることを肯定的に受けとめ、両文化が融合した「国際児としてのアイデンティティ」を形成していたが、インドネシアが優位だった。

【国際児二世】 まだ乳幼児であるため、成長とともに今後明らかになると考えられる。

なお、国籍については、2人を除く日本人の母親はインドネシア国籍に変更しており、日系国際児の場合も4人は日本国籍か二重国籍だが、3人はインドネシア国籍だった。インドネシア国籍者は、出生時には二重国籍だったが、大学進学や就職の際に国籍選択に迫られ、結果としてインドネシア国籍を選択していた。国際児二世の場合は、親（日系国際児）が二重国籍か日本国籍を保持している場合には、日本とインドネシアの二重国籍を取得できる。しかし、日系国際児がインドネシア国籍を選択すると、配偶者がインドネシア人の場合、国際児二世はインドネシア国籍し

しかもてない。したがって、日本国籍を保持している日系国際児を親としてもつ国際児二世だけが二重国籍である。本研究では、日本国籍を保持していても、国際児二世の国籍はインドネシアにした日系国際児もいた。

（５）文化継承における問題点と教育支援

日系国際児は両文化を理解しているが、日系国際児が継承した日本文化や日本人の感じ方・考え方の多くは、日本人の親を通して身につけたものであるが、それは親の日本文化の一部に過ぎない。日系国際児はそのなかのさらに一部しか国際児二世に伝えることができない。したがって、日本人の親（日系一世）がより多くの日本文化を日系国際児に伝達することが、国際児二世への日本文化の継承につながる。また、同居か別居か、会う頻度なども関係するが、日本人（日系一世）である祖母が国際児二世への文化・言語の継承に果たす役割は大きい。日系一世が、乳幼児期から、国際児二世に、日本語で話しかけ、日本文化を折に触れ伝達しようと試みることは、たとえ、日本語を理解していないようにみえても、国際児二世の日本語・日本文化への興味を促し、日本語・日本文化の継承につながると思われるからである。

日系国際児や国際児二世の日本滞在経験は日本文化を直接吸収する機会であり、日本文化の継承を促進する。そのため、日本への一時帰国の回数を増やすことは有用である。

補習校は日系国際児や国際児二世に日本語・日本文化を継承するための重要な機関だが、日系国際児はインドネシアで育ており、日本で育った日本人の母親（保護者）とうまく対応していくことは容易ではない。共通の話題が少なく、親同士の付き合い、保護者の役割分担も困難であり、経済状態も異なる場合もある。補習校が、国際児二世までも視野に入れるならば、受け入れ体制についての再考が必要であろう。

国際児二世への日本語・日本文化の継承については、日系国際児の配偶者の意向も大きい。日系国際児が母親の場合は、インドネシア人夫の賛成が必要不可欠であるし、日系国際児が父親の場合は、日常的に長い時間を子ども（国際児二世）と過ごすインドネシア人妻（母）の考え方も重要である。また、日系国際児の家庭に日本語環境がどの程度あるかも日本語・日本文化の継承に大きな影響を及ぼす。近年、インドネシアでも電子メディアが普及している。それらを有効に活用し日本語環境を作りだせれば、国際児二世が日本語や日本文化を継承する可能性が拡大するだろう。

「国際児としてのアイデンティティ」を形成している日系国際児であっても、成育歴や年齢等によって、その様相は多様なことが指摘されている。国際児二世の場合は、さらに多様であることが推察される。したがって、国際児二世自身の個性や国際児二世を取り

巻く状況に即した教育支援が必要不可欠である。

(6) 今後の展望

1990年初頭以来のインドネシアにおける縦断研究の調査参加者(日系国際児)のなかで、結婚し子どものいる人は1/4程度だったため、調査参加者数が少なく、国際児二世の年齢も低かったため、本研究では、国際結婚三世代にわたる言語・文化の継承や文化的アイデンティティの傾向を把握するにとどまった。国際児二世の数は、今後増加していくことが予想されるので、調査参加者数を増やすとともに、本研究の国際結婚家族三世代を追跡することによって、本研究結果を検証するとともに、発展させていくことが不可欠である。

乳幼児であるため、国際児二世がどのようなアイデンティティを形成していくかは本研究では明確にならなかった。日系国際児が「国際児としてのアイデンティティ」を形成するためには、二つ言語と文化知識を習得していることが条件だったために、国際児二世の場合も、「国際児二世としてのアイデンティティ」を形成する際に両言語・両文化の知識の習得が必要であろうという前提で、国際児二世への日本語・日本文化の継承を促進するための議論を進めてきた。しかしながら、国際児二世にとって、文化的アイデンティティ形成との関連で、日本語・日本文化の継承がどのような意味をもつかについては、今後、さらに実証的な研究によって明らかにしなければならない。

本研究では、日本人の母親をもつ日系国際児とその子どもの国際児二世からなる国際結婚家族三世代を対象にしたが、近年、増加傾向にある日本人の父親をもつ日系国際児と国際児二世からなる国際結婚家族三世代についても同様の調査をおこない、日系一世が母親か父親かによって、国際児二世への文化・言語の継承や文化的アイデンティティ形成がどのように異なるかを検討することも重要である。

教育支援に関しては、インドネシア在住の日系国際結婚家族三世代だけではなく、ほかの国の国際結婚家族三世代を視野に入れ、比較検討することによって、居住地と文化の継承や文化的アイデンティティとの関係を把握し、日系国際児・国際児二世全般に有用な支援と居住地に特有な支援を明確にする必要がある。

<引用文献>

厚生労働省 人口動態統計 各年
洪谷真樹, スイスにおける補習校と継承学校との比較考察: 国際結婚家庭の日本語教育に注目して、国際評論、第10号、2013、pp.1-18
鈴木一代代表、基盤研究(C)「日系国際児のアイデンティティ形成とその支援のあ

り方に関する実証的研究(H20~22年度) 2011、pp.216

鈴木一代、ナカニシヤ書店、成人期の文化間移動と文化的アイデンティティ: 異文化間結婚の場合、2012、pp. 180

鈴木一代、ブレーン出版、海外フィールドワークによる日系国際児の文化的アイデンティティ形成、2008、pp. 327

鈴木一代、国際家族における言語・文化の継承、異文化間教育、26号、2007、pp.14-26

鈴木一代、『国際児』の文化的アイデンティティ形成、異文化間教育、19号、2004、pp. 43-53

5. 主な発表論文等

[雑誌論文](計2件)

鈴木一代 移民・難民のこころのグローバル化: 移住国際結婚家族の場合 こころと文化、査読無、Vol. No.1, 2017、pp. 36-41

鈴木一代 多文化環境と精神的健康; 文化的アイデンティティと「居場所」を中心に、査読無、埼玉学園大学紀要人間学部篇、No.16、2016、pp. 43-52

https://saigaku.repo.nii.ac.jp/?action=pages_view_main&active_action=repository_view_main_item_detail&item_id=468&item_no=1&page_id=13&block_id=21

[学会発表](計4件)

鈴木一代 外国につながる子どもの言語と文化; 日本在住の国際結婚家庭の場合 日本教育心理学会(高松)2016年10月8日

Suzuki, Kazuyo "Ibasho," cultural identity and mental health of multiethnic people. International Association for Cross-Cultural Psychology. Nagoya (Japan), 01.08.2016.

Suzuki, Kazuyo National identity of multiethnic Japanese-Indonesian in Indonesia. International Association for Cross-Cultural Psychology. Nagoya (Japan), 31.06.2016.

鈴木一代 アイデンティティと「居場所」: 精神的健康との関係で 異文化間教育学会 桜美林大学(東京)2016年6月6日

[図書](計1件)

鈴木一代 他、明石書店、異文化に学ぶ「ひと」の教育(異文化間教育学大系1) 2017、237(担当 pp.148-171)

6 . 研究組織

(1)研究代表者

鈴木 一代 (SUZUKI, Kazuyo)

埼玉学園大学・人間学部・客員教授

研究者番号：4 0 2 6 1 2 1 8